

10月4日

アシジのフランシス

Franciscus Assisiensis

(1181~1226)

～フランシスコ会の創始者～

<人名事典などでの別表記：フランチェスコ、フランシスコ>

イタリアのアッシジの聖人であり、修道院フランシスコ会 (Ordo Fratrum Minorum) の創始者であるフランシスは、裕福な織物商の家に生まれました。フランシスはこの家庭で、放蕩を繰り返しながら、青年時代を過ごしていきます。

1202年、アッシジとペルージャとの間に戦いが起こり、彼はその戦いに参加します。しかし捕虜となり、一年間を獄中で過ごすこととなります。その後、彼は病気にかかり、壊れた聖堂で祈っている幻を見ます。その中で「フランシス、私の家が崩れている。直しにきなさい」という声を聞き、回心に至ります。

回心した彼は私財を投じ、サン・ダミアノ教会などの修復を行います。彼が教会のために金銭を使うことを嫌った父親と対立していきます。

その後、フランシスはマタイ 10章 7～10節のみ言葉 (行って、『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい。～) に心を奪われ、キリストの道に生きることを決意します。そして1208年、跣足説教者の服をまとって説教を始めます。

翌1209年には仲間が増えたため、ローマ教皇の承認を得て修道



「フランチェスコ」

フランシスコ・デスルバラン

(1658年)

会となります。これがのちの「小さき兄弟会」です。

フランシスはその後、スペインやモロッコ、また聖地エルサレムのイスラム教徒に対して宣教をするため霊的十字軍を起こしますが、殉教者を出す結果となります。

彼の伝説は多く残されています。中でも1224年、アルヴェルナ山で断食をしている途中に、キリストの受難を示す聖痕が肉体に刻印されたのは有名な話です。

またフランシスはキリストの僕として質素に生きながら、人々に仕え、また動物たちをも仲間にしていったそうです。

彼は巡回説教を続けるうちに目を患って視力を失いますが、1225年、その病による苦痛の最中に、全被造物を讃える「兄弟なる太陽の歌 (太陽の賛歌)」をあらわします。この歌は今でも多くの方々に愛されています。

<特禱>

全能の神よ、あなたの恵みによって聖霊の愛の炎をその心に燃やしたアシジのフランシスは、公会の燃えて輝く光となりました。どうかその信仰と愛によってわたしたちを燃え立たせ、光の子として常にみ前を歩ませて下さい。主イエス・キリストによってお願いいたします。
アーメン